

Chapter 03:ライバルに打ち勝て

福山からスプリット・ラン・テストの指南をうけてから数日、
大竹はすぐにテストに着手してデータ収集と分析を進めていた。
しかし、プロジェクト開始から間もなく、新たな問題が発生する。

数日後、福山は電話で満足そうに話をしていた。



・・・そうですか。大竹さんはやりましたね。
ことある毎に大竹さんの才能を妬んだ上司である課長が
彼のアイデアをもみ消していたというのもこれでクリアですね。



しかし、数千人の従業員を抱える大手企業の専務である貴方から
「若手の才能を開花させてやりたい」
と連絡を頂いた時は驚きましたよ。
・・・はい、それではまた何かあれば連絡をください。

それからしばらくして、大竹から福山に電話が入った。



福山さん、先日は色々ありがとうございました。
おかげで商品開発プロジェクトの新たな活動がスタートしました。



それはおめでとうございます。開発の進捗はいかがですか？



はい、早速スプリット・ラン・テストを実施しています。



セオリー通り進めていますか？



はい。プロトタイプが出来上がった段階で広告の切口を変え、
インターネット上に掲載して反響を見たり、
幾つかの商品を比較して消費者の生の声を聞いたり。
たくさんのデータが収集できました。



分析の方はいかがですか？



クラウドマネジメント協会から紹介された
分析スタッフの方に協力をいただき、とても感謝しています。



そうですか。それは良かったです。



はい・・・しかし新たな問題が出てきました。



おや、一体どんな問題でしょう。



それが・・・どこから漏れたのか、
商品を世に出す前に競合会社にサーチされ、
その会社も同じような商品の開発を始めた
という情報が入ってきました。



それは心配されたでしょう。



ええ。課長から厳しく言及され、
もし他社に先に類似商品を出されることになったら
責任を取れと言われたんです。